

陳舜臣さんを語る会通信

NO.48

Sep. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年9月20日

陳舜臣作詞 團伊玖磨作曲「上海日本人学校校歌」

陳舜臣さんは、1987年開設の上海日本人学校の校歌を作詞されています。作曲は團伊玖磨です。團伊玖磨は、他に、北京や大連の日本人学校の校歌を作曲され、国内となれば、50近い学歌、校歌、市歌、町歌などの作曲があります。陳舜臣さんに、他に校歌の作詞はあるのでしょうか。いずれにしても、珍しいことです。中国の日本人学校ということで、特別な思い入れがあったと思われます。（編集委員 橘雄三）

《1. 上海日本人学校》



下の画像は、同校のホームページより転載した現在の上海日本人学校です。こちらは虹橋校ですが、浦東にも校地があります。

世界で一番規模の大きな日本人学校とのこと。



《2. 上海日本人学校校歌 歌詞とメロディー》

作曲をされた團伊玖磨氏は2001年5月17日、日本中国文化交流協会主催の親善旅行で中国旅行中に心不全を起こし、蘇州市の病院で亡くなりました。77歳でした。1924年のお生まれですから、陳舜臣さんと同い年です。

2001年、氏を偲んで、校歌のオルゴールが作られました。オルゴールとそのメロディーがYouTubeにアップされていますので、ここに紹介いたします。動画を開いて、ぜひご試聴ください。

右の画像は、YouTube、“上海日本人学校のオルゴー

校歌	
二	一
あ緑さ力友風二	あ色心友わ黄
あゆあを達もつ	あああを達が浦
たあよ光の	あああ合よ故の
上かふつもく	上やかわけの郷水
海なりめへ同に	海かけせへのは
日仰友じの	日な渡友岸
本ブご希達空	本そ富達を海
人ラう望よ山と	人虹う士よつこえ
学タよにもえて	学校橋のよめざし
校ナス	われら
われら	

作曲 陳舜臣
作詞 團伊玖磨

ル～2001年團伊玖磨先生を偲んで～”より転載させていただきました。



本号で取り上げた記事

今まで、一号一作品、陳舜臣作品の紹介を基本に発行してきましたが、本48号は、そのことには拘らず、未処理袋に溜まった資料をいくつか記事にしてみました。

第1ページ 陳舜臣作詞、團伊玖磨作曲、上海日本人学校校歌

第2ページ 『怒りの菩薩』 観音村出身の留学生、陳舜臣さんの政治意識を弾劾！

第3ページ 戦後の中国を舞台にした小説のない理由を考える

落ち穂拾い 《蔡さんと共同で借りた北野町の避難先》

第4ページ 陳舜臣さん、毛沢東の胸像があったころの移情閣を訪れる

『怒りの菩薩』 観音村出身の留学生、陳舜臣さんの政治意識を弾劾！

《1. 詰問状、「拝啓陳舜臣殿」》

まず、読売新聞社発行(1996年)、新本格推理小説全集2『影は崩れた』『解説 松本清張』の「怒りの菩薩」に触れた箇所を引用します。



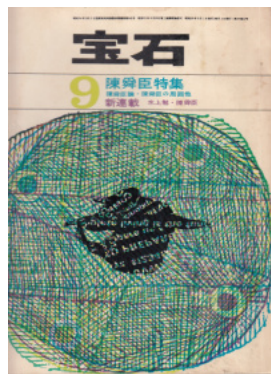
戦後台北に引き揚げた主人公が、妻の実家に落ちついてみると、中国大陆で死んだはずの兄が生き返ってきている。しかもその兄が菩薩山に出かけて殺される事件で、兄は戦争中、大陸に渡って抗日組織の一員になっていたらしいのである。

台湾の風物、戦後の台湾の情勢、それを取り巻く人物などは、さすがに生き生きと描かれている。スパイ・スリラー的要素を加味しているが、伏線を丁寧に書きこんだ本格物であった。(上の画像は集英社文庫版の表紙)

神戸ばかりを舞台にしていた作者として、台湾にふさわしい謎は是非書きたかったものだろうが、これを読んだ観音村出身の留学生から、「拝啓陳舜臣殿」という七十枚の詰問状が舞いこんだ。作者の政治意識を弾劾したものだそうだが、お蔭で氏は、エンターテインメントの作品には台湾を使うまいと決心した由である。(下線は編集委員)

《2. 詰問状、「拝啓陳舜臣殿」の初出は『宝石』》

上述下線部分、初出は『宝石』昭和38年9月号「ある作家の周囲—陳舜臣篇」です。これは、安西晴衛氏が陳舜臣宅を訪れて取材・執筆した記事です。本通信第41号に取り上げています。その箇所を今一度、掲載します。



■ 自作を語る「怒りの菩薩」

故郷の台湾を舞台にした。菩薩村は実在の観音村がモデルである。

観音村出身の留学生から『拝啓陳舜臣殿』という七十枚の詰問状を受取った。作者の政治意識を弾劾したものである。つらい。エンターテインメントの作品には台湾を使うまい、と、心に誓った。

ここで、詰問状の作者の政治意識については説明されていませんから推察するしかありません。

私は、『怒りの菩薩』を一読、「詰問状」の存在を知る以前から陳舜臣さんの「台湾人の漢族意識」理解

に疑問を持っていました。

《3. 陳舜臣さんが言う「台湾人の漢族意識」》

『怒りの菩薩』中で、陳舜臣さんは次のように記しています。(集英社文庫版 p.192)

日本統治の50年間、台湾人は大陸から隔離されていたといってよい。戦時中の『皇民化運動』は、統治者が台湾人の漢族意識を破壊しようと、はっきり意図したものだった。それにもかかわらず、『皇民化運動』は、台湾人の日本人化に失敗した。漢族意識だけは、台湾人の胸から剥奪できなかったのだ。

私は、『怒りの菩薩』のこの記述を読んで、侯孝賢の『悲情城市』の一コマ(下の画像)が頭に浮かびました。酒場で議論していたインテリ青年たちが、窓外から聞こえてくる「我家在松花江那邊」に唱和するシーンです。歌詞は北京語で、「九・一八、九・一八、あの悲惨な日から家や故郷を離れ」という柳条湖事件にはじまる日中戦争の苦しみをうたったものです。



当時、こんな歌を唱和できる台湾人がどれだけいたか疑問でした。のち、『悲情城市』のこのシーンは、私の疑問と同じ理由で、台湾社会でも問題になったと聞き、納得しました。

多くの台湾人が、胸に『漢族意識』を持って戦後を再出発したとするのは、おそらく、そう思いたい「陳舜臣さんの想い」と理解しています。

■ 「観音村出身の留学生」は一体どういう立場から「作者の政治意識を弾劾」したのでしょうか。この点に関し、垂水千恵「台裔作家が描く台湾表象—陳舜臣・東山彰良を中心に—」に詳述されています。ネットで検索できますので、是非、一読下さい。

《4. ほかに戦後中国を舞台にした小説のない理由!?》

陳舜臣さんが『怒りの菩薩』のほかに、戦後中国を舞台にした小説を書いていないのは、「詰問状」の所為だけではないように思えるのですが、どうでしょうか。これに関し、次頁で考えてみます。

戦後の中国を舞台にした小説及び歴史記述のない理由を考える

『怒りの菩薩』は1962年の作品です。陳舜臣さんは、まだ40歳前、作家としてのかけだし時代です。ですが、プロの作家に「つらい。エンターテインメントの作品には台湾を使うまい、と、心に誓った」と言わせるのですから、「詰問状」はよほどの内容だったのでしょう。そしてその「誓い」通り、他に、台湾を舞台にした小説はありません。

では、大陸ではどうでしょうか。

陳舜臣さんは、文庫本『中国の歴史 七』（1991 講談社文庫）の「文庫版完結にあたってのあとがき」で「私がほんとうに書きたいのは、くどいようですが近現代であり、残された歳月も考慮して、歴史記述と小説との二つの手段で、それをはたそうと思います」と決意を語っておられます。また、陳さんは■「東アジアの近代はアヘン戦争にはじまる」とおっしゃっています。

①先ず、小説で見てみましょう。

近現代中国を舞台にした小説の本線は、時代順で、『阿片戦争』『太平天国』『江は流れず』『山河在り』です。『山河在り』は関東大震災（1923年）から日中十五年戦争前夜までを描いています。

この他、昭和初め～終戦までの中国が描かれている作品としては『残糸の曲』『桃花流水』『相思青花』『夢ざめの坂』などがあります。

小説で描かれているのは、この時代までで、「近現代」の「現代」、即ち、第二次国共内戦、中華人民共和国成立後の大躍進や人民公社、文化大革命、天安門事件などを描いた小説はないと思います。

例外1 ■『青玉獅子香炉』で、終わり近く、第二次国共内戦時の南京、台湾が描かれます。この作品については、故宮の関係者から抗議が寄せられています。

例外2 ■『玉嶺よふたび』に、主人公が文革期の中国を訪れる場面があります。時代がそうだというだけで、文革云々の記述はありません。

②次は、陳舜臣さんおっしゃる「歴史記述」です。陳さんは中国通史2作を執筆されています。三皇五帝から民国誕生までを記述した『中国の歴史』全

15巻と、義和団前後から始まる『中国の歴史 近・現代篇』4巻です。

ところで、後者は企画段階では、全13巻で、文化大革命も視野に入れ、各巻の題名も決まっていたかもしれません。それがどうして、第4巻(民国誕生)で打ち切られてしまったのでしょうか。

二十六史を中心に、歴史書に描かれた時代・社会や、せいぜい、孫文の前半生あたりまでは書けても、それ以降は政治絡みで踏み込めないという状況があったのではないのでしょうか。時間が足りなかったというだけではなかったのです。

結果的には、台湾においても、大陸においても、歴史記述と小説の二つの手段で「自分の生きた時代」を書くという念願は叶いませんでした。



中国の歴史 近・現代篇			
全13巻 陳舜臣 写真＝陳立人			
定価＝各1,600円 A5変型判・各巻平均300頁・カラー8頁			
1 黄龍振わす	義和団前後	1986 年刊	
2 落日に立つ	革命前夜	1987 年刊	
3 黎明に燃ゆ	辛亥革命	1988 年刊	
4 大同の夢	民国誕生	1991 年刊	
5 疾風怒濤	五・四運動		
6 雲は翔ぶ	国共合作と北伐		
7 故園暗し	抗日戦(一)		
8 山河尽きず	抗日戦(二)		
9 劫波を渡る	抗日戦(三)		
10 大江は東に流る	内戦と解放		
11 無限の風光	大躍進と文化大革命		
12 雷鳴やまず	文化大革命の終焉		
13 いくたびかの青春	二十一世紀にむけて		

落ち穂拾い 《戦時中、蔡さんと共同で借りた北野町の避難先》

『道半ば』(p. 127-8)から抜粋・引用いたします。

港湾設備がまっ先に狙われるのは、誰の目にもはっきりしていた。海岸通五丁目の我が家が危険区域にあるのはどうぜんなので、しばらく北野町一丁目に住居を移すことにした。

これは家主がサッスーンというユダヤ人で、ここを同じ貿易商仲間の蔡さんと共同で借りた。

この時期の興味ある写真(陳舜臣さんの姪・陳來幸氏所蔵)を右にあげます。

集合写真、のちに、陳舜臣さんの奥さんになる蔡錦墩さんから見た呼称で、左から、お父さん、



お兄さん。家の外観が少しわかります。

ご本人、お兄さん、前列、弟3人、お母さんです。

陳舜臣さん、毛沢東の胸像があったころの移情閣を訪れる(1974.11.19)

1974年11月19日、陳舜臣さんは、北京大学社会科学友好代表団を案内、移情閣を訪れています。代表団の交流活動は、京都大学人文科学研究所編『学問に架ける橋』（小学館 1976年）として発行されていますが、この内、交流日誌の11月19日の箇所を下にあげました。ここに、陳舜臣さんの名前が出ています。

下の写真2葉は孫文記念館安井三吉名誉館長所蔵です。撮影日時は1973年11月となっています。陳舜臣さん訪館の時もこのような状況だったのですが、陳さんはどう感じ取られたのでしょうか。因みに、1974年11月といえば、陳さんは、北京、大連、延安、西安、南京など、中国旅行をされてきたばかりの時期です。この頃の移情閣については、「[移情閣]を管理・運営する華僑団体の政治的スタンスの変化」という題で、『呉錦堂を語る会通信』第43号に詳述しております。併せてご一読下さい。（編集委員 橘雄三）



←左の写真、孫文胸像の上の赤いパネルには次の文章が記されています。

纪念伟大的革命先行者孙中山先生！

纪念他在中国民主革命准备时期，以鲜明的中国革命民主派立场，同中国改良派作了尖锐的斗争。他在这一场斗争中是中国革命民主派的旗帜。

纪念他在辛亥革命时期，领导人民推翻帝制、建立共和国的丰功伟绩。

纪念他在第一次国共合作时期，把旧三民主义发展为新三民主义的丰功伟绩。

他在政治思想方面留给我们许多有益的东西。

现代中国人，除了一小撮反动分子以外，都是孙先生革命事业的继承者。

1956年11月12日《纪念孙中山先生》毛沢東



↑上の写真は毛沢東胸像。下の赤い台の部分には、「毛沢東同志は、現代におけるもっとも偉大なマルクス・レーニン主義者である。毛沢東同志は、天才的、創造的、全面的にマルクス・レーニン主義をうけつぎ、守り、発展させてマルクス・レーニン主義をまったく新しい段階に高めた」とあります。

この文章は、林彪が『毛主席語録』の再版のために書いたまえがきです。

十一月十九日（火）
いよいよ京都をはなれる。名神高速道路をバスで神戸大学へ。戸田義郎学長と会見。各学部長が同席される。昼、六甲山上で戸田学長主催の昼食会。神戸という土地がらもあって中国への親近感はずいぶん。教育制度などについてなごやかな懇談がつづく。六甲は満山紅葉し、眼下にのぞむ海が美しい。午後の講演会はストのため中止、作家陳舜臣氏らの案内で孫文ゆかりの六角堂を訪ねる。久しぶりにくつろいだ一日だった。
今日から仏教大学助教授吉田富夫氏が通訳をかねて随行して下さる。

上の枠内、傍線の箇所に陳舜臣さんの名が見える。（傍線は編集委員）